

●世界認めた伝統の技

日之影町の町民は「日之影町は巨大資産の持ち主」という。

阿蘇溶結凝灰岩を削って流れる五ヶ瀬川の峡谷は、日之影町付近から険しい絶壁を見せ始める。古くから村々は、峡谷の上面の山すそに開かれ、深い谷を隔てて間近に向き合っていた。

川に沿って峡谷の底を走っていた国道は三十年ほど前から、峡谷の上を走るようになった。現代技術の粋をつくした長大橋が次々に架かり、その視界は山並みの果てまでも開けるようになった。

日之影町に架かる長大橋建設の総事業費は、一九八五（昭和六十）年完成の青雲橋が三十九億円、九〇（平成二）年の林道橋・龍天橋が十九億円、さらに九三（同五）年のふるさと農道天翔大橋が六十七億円である。このほかにも国道218号は多くの長大橋でつながれている。



山里に伝わる竹細工。今では世界に誇る伝統工芸品になった

町内を走る町道もいたるところに永久橋があつて、総数は二百十を数える。

中でも庄巻は三日月形にカーブして峡谷をまたぐ天翔大橋。景観も抜群で、橋の中ほどには風力発電の小型風車が回り、夜はライトアップする。橋と溪谷の町にふさわしい風物詩となっている。

この町に、伝統的な竹細工の技を究極にまで高めた二人の名工がいる。

一人は広島一夫さん（ハ）。子供のころから竹細工の技を習得して十八歳で自立。「しようけ」「ばら」など日用品に見る技は繊細で美しい。

八一（昭和五十六）年「日本民芸公募展」で労働大臣賞。翌年、来日したニューヨークのジャパン・ソサエティー旅行団に注目され、六年後にワシントンのスミソニアン協会国立自然史博物館に竹細工百点と製作道具の一部を納めた。

九二（平成四）年には「現代の名工」として表彰され、昨年作品が大英博物館に納められた。

もう一人が飯千五雄さん（ヒ）。太平洋戦争中に小倉工廠（こうしょう）に動員されたが、戦後は竹細工に打ち込んだ。村の生活必需品であった「かるい」を作り、六九（昭和四十四）年の「日本民芸公募展」で、伝統技術優秀賞を受けた。「かるい」は美の工芸品となり、八二（同五十七）年ジャパン・ソサエティーに紹介され、スミソニアン協会のサックラー美術館で製作実演。作品も同協会の自然史博物館に展示されている。

名工の技は世界に出た。地元では西日之影の中村商店に作品が展示されている。

甲斐亮典